

# フォルクスパークの思想

——ベルリンの公園緑地をめぐって——

田村 和彦\*

## The Idea of Volkspark

Kazuhiko TAMURA

**要旨：**「緑の首都」を標榜するベルリンには現在、公園緑地を中心に大規模な緑地のネットワークが築かれている。それは19世紀の始めから徐々に形成されていったもので、大きな断絶と変遷から生まれた。論文では19世紀的な公園のプロトタイプとなるフォルクスガルテンと、20世紀の初めに急激な都市環境の変化に対応すべく生まれた新しいタイプの公園、フォルクスパークを対比して、特に後者がベルリンの都市計画の中でどう位置づけられていくかを考察する。第一次大戦をはさんでワイマール共和国の時代にブームを迎えるフォルクスパーク開設の動きは、ひとつの思潮としてとらえることができる。それは「装飾的」な緑地に対して「実用的」な緑地を対置し、人間の健康の促進に影響を与えることに緑地の最も重要な機能を見る。これが「衛生的緑地」である。建築家のマルティン・ヴァグナーはこの考えを軸に、ベルリン全域の都市計画に着手する。それは現在のベルリンの「緑のネットワーク」の構想を先取りするものといえる。

### Abstract :

Berlin is known as the green capital with extensive green areas. These areas set into a green urban network and make an important contribution to the preservation of the environment. This network has been built from the beginning of the 19th century gradually, based on the view of the urban green area, especially the city parks. This paper traces the development of ideas about green spaces in modern cities historically, taking Berlin as an example, from the end of 18th century until the beginning of the 20th century. *Volksgarten* was the prototype of most parks planned in Berlin during the 19th century. Responding to the rapid increase of population and deterioration of the urban environment during the 19th century appeared a new type of public garden *Volkspark* in the beginning of the 20th century and boomed during the era of Weimar Republic. Its idea of total popularization, democratization and socialization of public space is revolutionary. The key concept of this garden-movement was the idea of *sanitäres Grün* (sanitary green space), contrasted to decorative parks. Martin Wagner, the leading architect, applied this conception strategically, and drew a systematical schema of total green space of Berlin, which he partially realized in rural-urban concept of garden cities.

キーワード：ベルリン、公園緑地の歴史、都市計画、Volkspark

---

\*関西学院大学国際学部教授

東西ドイツの統合によって1991年にふたたび首都となったベルリンは、現在の人口350万人の大都市である。第二次大戦までのドイツ帝国の首都は爆撃によって瓦礫の山と化し、その後東西に分断されて、約40年間「二つのベルリン」として異なる政治体制の下で存続してきた。「壁」の崩壊と東西ドイツの統合から四半世紀を経た現在、ベルリンは新たな首都としての機能と体裁を急速に整えつつあるが、戦前の「大ベルリン」の威容は想像するべくもない。

ただし、著しい変転を経てなお、以前と似た形で保存、もしくは維持されている区域もある。それが市内にいくつもある広大な公園と緑地で、これらはベルリンに「緑の首都」というべき外観を与えている。たとえばベルリンの中核に位置するブランデンブルク門のすぐ西には、210ヘクタールを擁する広大なティアガルテンの叢林が、シャルロテンブルク宮に至る東西の軸線を成す道路に沿って延々と2.5キロメートル続く。森鷗外の『舞姫』にも「獣苑」として登場するこの緑地は、もと王宮に付属する狩猟場、飼育場であったものが19世紀初めに民衆に開放され、その後は公園として整備されてきたものである。第二次世界大戦末期には園内の樹木は燃料にするために刈り払われ、さらに街全体が瓦礫の原と化した戦後は、皆伐された緑地が掘り返されて一時的に食糧自給のための畑地として利用されるなどしたものの、ティアガルテンはベルリン西地区において半世紀にわたって公園敷地として維持され、今は再び深い緑に覆われて1991年の首都移転後も中心地区の重要な景観を作りだしている。

ベルリンにおいて緑地が広大なネットワークを作り上げていることも見るべきであろう。都市計画における「緑地」はもともとドイツ語の Grünfläche が翻訳されたもので、公園だけでなく、街路樹の植えられた歩道、池や水路などの水面、運動場、さらに墓地や市民の運営に任された菜園(クラインガルテン)までを含むオープンスペースを指す。そうした緑地がベルリンでは単独の空地として存在するのではなく、都市に張りめぐらされて互いに連結し、関連し合う緑のネットワークとして構想されている。ティアガルテンのあるミッテ地区のほか、すべての区には街区の中に、公園をはじめ大規模な公共緑地が設置され、それは小規模の緑地とつながりあっているだけでなく、さらに緑道や水路によって郊外の森林や水辺ともつながっている。過去100年だけを振り返っても、度重なる破壊と分断を経験し、そのたびに大規模な改造を繰り返してきたベルリンが、この「緑のネットワーク」というべきシステムをなお維持し、さらに現在も補完しつつあるのは、特筆すべきことである。

本論では、都市計画や造園論とはやや違った観点から、ベルリンにおける公園施設の成立と変遷の歴史的過程に注目し、そこで培われた「緑地の思想」の系譜というべきものを明らかにしたい。

## I 前 史

まず、公園をはじめとする都市の公的緑地がドイツでどのように発生し、どのような変遷をたどったかを簡単に見ておこう<sup>2)</sup>。広く一般に公開され、人々が自由に立ち入ることができるような公

- 1) 緑地(りょくち)とは、都市計画・造園の用語としては、「交通や建物など特定の用途によって占有されない空地を空地のまま存続させることを目的に確保した土地」を意味する。一般には樹木、草花などの緑で覆われた土地を指すが、実際は農地などの裸の土の地面や水面も含むことが多く、そのため空地(くうち、オープンスペース)とはほぼ同義である。この意味の緑地には、公園・広場・墓園などが含まれ、必ずしも植物が生えている必要はない。1933年(同年に都市計画法(旧法)が成立)の東京緑地計画協議会によって、「緑地とはその本来の目的が空地にして、宅地商工業用地および頻繁なる交通用地の如く建蔽せられざる永続的のものをいう」と定義された。この論文では、公園を始めとする公共緑地のほか、自然緑地、生産緑地、共用緑地を広く「緑地」として扱っている。
- 2) ドイツの公園発達史については白幡洋三郎『近代都市公園史の研究 - 欧化の系譜 -』思文閣出版、1995で詳しく論じられている。また、ベルリンの公園史については、Dieter Hennebo; Berlin. Hundert Jahre Gartenbauverwaltung, Vom Beginn des 19. Jahrhunderts bis zum Zweiten Weltkrieg, in: Das Gartenamt (Sonderdruck), Heft 6, 1970から多くの知識を得た。ヘネボの論文は、佐藤昌編の『ベルリンの公園』(社団法人日本公園緑地協会発行、1975年)に「ベルリン公園の100年史」(佐藤昌訳)として収録されている。小論ではこの訳に依拠した。

園が生まれたのはドイツにおいてようやく19世紀になってからである。それ以前は啓蒙君主や貴族の慈善や権威誇示の一環として、庭園など彼らの所領の一部への出入りが一般にも開放されたにすぎない。たとえば、ティアガルテンは18世紀なかばのフリードリヒ大王の治世に一般人の立ち入りが許されていたことがあったが、それは王の意向もしくは気まぐれに左右される、一時的かつ限定的な措置だった。ちなみに、一般的に庭を示すガルテン *Garten* とは異なり、パルク *Park* とは王侯や貴族が所有する、狩猟用に囲い込んだ猟区 (*Gehege*, 仏語 *parc*, 中世ラテン語 *parricus*) を示す言葉で、もともと「公的」に開放されたものでも、自由に利用できるものでもなかった。

そうした「閉ざされた」庭園のあり方に対して、広く一般市民に開かれた「公園」のあり方をドイツで最初に提示したのがクリスティアン・ヒルシフェルト (*Christian Cay Lorenz Hirschfeld*, 1742-92) である。キール大学の哲学・美学の教授であったヒルシフェルトは5巻にわたるその『造園理論』(1779-85)の最終巻でフォルクスガルテン *Volksgarten* という概念を提唱し、一般人が自由に立ち入ることができる遊歩道や広場、公園を、都市に不可欠な野外空間として設けることを提唱する<sup>3)</sup>。そこは民衆 (*Volk*) に対して開かれた場所であり、王侯や領主の私的な目的ではなく、民衆の慰安と享楽と社交の用に供されるべき公的空間である。

ヒルシフェルトのフォルクスガルテン構想の顕著な特色は公開性と並んで、民衆教化という目的にある。彼によればフォルクスガルテンは、都市生活で荒廃した民衆の心身に自然によって慰安を与える厚生施設であるとともに、自然との穏やかな触れあいを通じて彼らに「良き」趣味や美意識、「正しい」娯楽、公序良俗や社交のあり方を教える教育の場でもあるべきである。これは神に替えて自然を教師とした人間形成を謳う、18世紀の啓蒙思想に合致する考えと言えよう。

民衆の福祉と教化に関連して、ヒルシフェルトはこの公園が「愛国的」であるべきことも強調し

た。『造園理論』が出版された18世紀後半においては、王室の庭園を始めとして、大規模庭園のほとんどはイギリス式の風景庭園やフランス式の幾何学庭園の影響下にあったが、ヒルシフェルトは外国趣味をのがれて、自国の風土や歴史に根差し、郷土愛を涵養する「国民のための庭園」を提唱するのである。領邦や自治都市が分立割拠していた当時のドイツに統一的な国民意識が存在したわけではないが、少なくともイギリス式やフランス式に対抗する庭園の「ドイツ的」なあり方の端緒が示されたのは重要である。この場合、「ドイツ的」とは、庭園の様式そのものを指していたわけではなく、この庭園が漠然と想定していた、王侯や富裕層だけではなく、都市に生活する民衆全般を包括する、共通の趣味や志向をそなえる未来の国民的共同体のあり方を示すものだった。

フォルクスガルテンの構想に近い、一般民衆が自由に立ち入ることができる最初の大規模な都市緑地が設置されたのは1791年、ミュンヘンのエングリッシャー・ガルテンだとされる。ただし、これは選帝侯の布告によって、敷地も費用も王室財産を拠出して設置された風景式庭園である。名実ともに民衆の意思で公園のための用地が調達され、公的費用を投じて緑地が開設されたのは1830年、マクデブルクのフリードリヒ・ヴィルヘルムス・パルクが最初である。1824年に市議会での決議と拠金に基づいて計画されたこの公園の設計・監督を行ったのがレンネ (*Peter Joseph Lenné*, 1789-1866) で、長くポツダムのサンサーシー宮殿の庭園監督を務めたレンネは、当時プロイセン王室造園総監としてドイツの造園設計家の頂点に立ち、その後もドレスデン、ブレスラウ、リュエックなどでこのタイプの公園緑地の設計を手がける。プロイセン王室の狩猟場であったティアガルテンの公園化に手を付け、広大な敷地の中に放射状の軸線をいくつも配して統一的な美観に基づく修景を行ったのもレンネであった。レンネを引き継ぐのが弟子のマイヤー (*Gustav Meyer*, 1816-1877) で、後にベルリン市の初代造園局長の職に就いた彼のもとで、ティアガルテン

3) ヒルシフェルトのフォルクスガルテン思想については、白幡、上掲書 23-29 ページに詳しい。

の民衆公園への改修は本格的になる。ベルリンではマイヤーのもとで1880年代までにフリードリヒスハイン(34 ha、後に49 haに拡張。1840年)、フンボルトハイン(29 ha、1869-76年)、トレプトワー・パルク(88 ha、1864-88年)などの、現在も残る大規模な公園施設が旧市街の中心部を取りまく形で設営された。

ただしこの時期までの公園は、設営の主体が王侯から市民の側に移ったとしても、その基本的な用途は都市景観の美化と、市民への一時的な慰安や休息の提供であり、利用の方法もそぞろ歩きや眺望、適度の休息に限られていた。様式的には、馬車が行き違ふことができるほど広く見通しのきく強い軸線(あるいは周回路)に沿って花壇、芝生、植栽、噴水や池を整然と配置して広々とした眺望を提供するフランス式整形庭園と、曲がりくねった遊歩道と深い樹林に特色があるイギリス式風景庭園を折衷したものが大半で、随所に記念碑や立像が据えられていた。また、ヒルシフェルトのフォルクスガルテン構想にあった啓蒙的、民衆教化的な意図も受け継がれている。自治体が設置の主体となり、その委託を受けた造園家によって設計・施工される市民公園は、秩序観念と美意識によって貫かれた緑の理想郷であり、教養市民階級が自らの威厳と権勢を示すとともに、自らの理想に基づいて民衆を教え導く場である。さらに、王や偉人や英雄に仮託して、市民階級の成し遂げてきた営為を公的に記念する場である。その意味で白幡氏がヒルシフェルトからマイヤーまでの造園の思想的背景を総括して、この時期の公園を「緑の啓蒙施設」と名付けているのは示唆に富む<sup>4)</sup>。上にあげたフリードリヒスハインの開設が1840年のフリードリヒ大王戴冠百年祭のために計画されたことも、公園の国民教育的・記念碑的な性格を物語っている。フンボルトハインも博物学者アレクサンダー・フンボルト生誕100年を記念して、自然科学的な教育施設を併設して開設したものだ。ちなみにハインとは「聖域としての杜」を意味する雅語である。

## II 装飾的緑地と衛生的緑地

こうした公園のあり方が大きな転機を迎えるのは、都市環境の急激な変化のためである。プロイセンの首都であったベルリンの19世紀初頭の人口は17万人ほどであった(それでも、ドイツ領邦の中では随一の「大都市」であった)。それが世紀の半ばには周辺から膨大な数の住民が移り住むことで人口は40万人を超え、さらに1866年に北ドイツ連邦の、ついで1871年にドイツ帝国の首都となって以降、70年代の人口は100万人を超える。レンネとマイヤーによるベルリンでの新たな公園の敷設も世紀半ばまでの人口増を考慮したものであったが、その後もとどまることのない人口の激増にはとうてい対応し得なかった。

特に深刻だったのは住宅難と住環境の極端な悪化である。1861年に市域が大幅に拡大したのに伴って公表されたベルリンの大改造計画、ホープレヒト・プランでは、激増する人口に対応する住宅政策は示されず、かえって土地投機の過熱を招いて住宅事情の悪化に拍車をかけた。人口の集中する中心部にはミーツカゼルネ(賃貸兵舎)と呼ばれる四、五階建ての高層集合住宅が密集して乱立したが、主に貧困層が居住するその内部は、部屋ばかりでなく、屋根裏や地下室、階段を含めてあらゆる空間が居住のために利用され、狭いスペースに何世帯もが生活する劣悪な状況だった。外光が入らず、換気もめったにされず、汚水が垂れ流されるままの室内は不衛生で、結核やコレラをはじめとする流行病の温床ともなった。

この状況を改善することが19世紀末の都市計画や公共政策の喫緊の課題となるのだが、その際公園緑地も新たな役割を担うことを期待されるようになる。すなわち、オープンスペースを提供することで狭隘な住環境を補完し、改善するとともに、貧困層を含めた都市住民全体の生活改善や福祉、健康向上と保健衛生に資することである。緑地が都市環境の改善、具体的に言えば、空気清浄化や塵埃の除去に一定の効果があることはすでに19世紀の初めから公言されていた。都市周辺

4) 白幡 上掲書17ページ。この表現は第一章、第一節のキャプションにある。

の森林や田園地帯を指して「都市の肺臓」と呼ぶことは以前からあった。ただしそれは生理学的な知識に基づくというより、多分にロマン主義的な自然賛美を背景にした観念的な思い入れに由来するものであった。レンネやマイヤーも野外における身体活動や娯楽が都市住民にある程度の保健衛生的な効果をもたらすことは認めてはいたものの、それらの活動は市民的な風紀良俗の範囲に限定されるべきだとしており、社会改革的な生活改善を意図したとはいえない。

緑地に明確な保健衛生的・生活改善的な機能を認める際に大きく貢献したのは、「衛生緑地 (sanitäres Grün)」という概念である。これはウィーンの建築家カミロ・ジッテ (Camillo Sitte, 1843-1903) が著書『芸術的基盤に基づく都市建設』(1899 初版) の補遺で<sup>5)</sup>、「装飾緑地 (dekoratives Grün)」と対比して提唱したものである。もともとジッテはこの補遺で、都市の街路や広場に植栽されてもっぱら人目につくことを目的とした装飾的緑地に対して、騒音や塵埃から保護された、街路に面していない中庭のような私的空間で慰安をもたらす緑地を「衛生緑地」と名付けたのだが、この概念は都市計画家や公園設計者の間で、ジッテの用法を離れて大幅に拡張して使われる。たとえば戦間期のベルリンでブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938) らと大規模な公営住宅を立案するマルティン・ヴァグナー (Martin Wagner, 1885-1957) は、この概念をタイトルに掲げた論文「都市の衛生緑地」で衛生的緑地とは「人間の健康の促進に影響を与えるすべての緑地と緑地帯」だとする<sup>6)</sup>。sanitär はラテン語の sano (治療する、健康にする、正す) に由来する語であるが、この時代には狭い意味での「清潔」ばかりではなく、身体の保全と管理、保養、健康増進といった私的な領域から、疾病の予防と治療、公衆衛生政策、住環境を始めとする都市環境の整備

・改善といった公的な領域までをカバーする概念だった。緑地がこのような機能や効用を持つという考えが広く受け入れられた背景には、先に述べたような大都市の住環境の著しい悪化への対応が緊急性を帯びていたことと共に、医学の応用分野としての衛生学の普及、伝染病の流行、貧困層を含む国民全体の健康の維持・増進に向けた公衆衛生への要請の高まり、労働時間の減少による余暇の増大<sup>7)</sup>と、それに伴う身体文化に対する国民の関心の高まりがあったことは間違いない。こうした気運を受けて、ドイツでは 1872 年に社会政策協会が、その翌年には公衆衛生協会が設立される。

### III フォルクスパルクの登場

19 世紀的な公園緑地が、大都市の突きつける新しい現実に対応できないものになっていたことはすでに触れたとおりである。ついでに言えば、世紀をまたいでベルリンの人口は 200 万人を突破していた。中心部に点在する用途の限られた公園は、膨大な人口に見合うオープンスペースとしてはどうに役に立たなくなっていた。美観だけを重視した既存の民衆公園は「王侯の荘苑 (Fürstenpark)」と呼ばれて揶揄される。一方で、ホープレヒト・プランに伴う土地価格の高騰による乱開発と用地難から、新たな公園を設営することは困難になっていた。実際、ベルリンではレンネとマイヤーの路線を引き継ぐフォルクスガルテンとしては最後のものにあたるヴィクトリア公園 (7.5 ha, 1894 年に完成) が計画された 1875 年以降、市内で設営された公園はこれ一つのみで、その後およそ 30 年以上の間、ベルリンの公園緑地設営の動きは停滞する<sup>8)</sup>。

世紀が変わってしばらく後に登場するのが新しいタイプの公園緑地、フォルクスパルク Volkspark<sup>9)</sup>である。このタイプの公園は、装飾的な緑

5) Camillo Sitte: Der Städtebau nach seinen künstlerischen Grundsätzen. fünfte Aufl. mit Anhang: Grossstadtgrün. この補遺はジッテの死後、第 4 版以降に付け加えられたものである。

6) Martin Wagner: Das sanitäre Grün der Städte. Ein Beitrag zur Freiflächentheorie, Diss., Berlin 1915, S.1

7) 1890 年には、12 時間以上であった平均的労働者の一日の労働時間が 10 時間に減少される。また、日曜が一斉休日となるのは 1891 年である。

8) ヘネボー「ベルリン公園の 100 年史」33、41 ページ

9) この論文ではフォルクスパルクという名称を特定のタイプの公園を指すものとして使っているが、実際にはノ

地観から離れ、用途を重視した「利用できる」緑地を大規模に取り入れた公園で、これまで緑地のなかったベルリンの外縁の住宅密集地の近くに大規模な用地を公共の費用で買収して設けられたものである。それは、労働者や貧困層を含むあらゆる年齢、あらゆる階層の住民の要求にこたえることを目指したもので、昼夜、季節、天候に関わりなく立ち入ることができる。しかも、入場料も施設使用料も要さない。簡単に言えば、公園の徹底した大衆化と民主化、社会化がはかられるのである<sup>10)</sup>。

フォルクスパルクを旧来のフォルクスガルテンとは全く異なる「社会的公園」としてとらえ、1913年に「ドイツ・フォルクスパルク同盟」を結成してドイツ全土での普及を訴えた造園設計家ルートヴィヒ・レッサー (Ludwig Lesser, 1869-1957) の『今日と明日のフォルクスパルク』<sup>11)</sup>に沿って、このタイプの公園の特徴を3点に絞って見ておこう。

フォルクスパルクの第一の特色は、装飾や美観ではなく、実用的な用途に応える場であることである。公園の提供する保養とは、観念的・精神的なものではなく、具体的・肉体的なもので、すべての人々に開かれていなければならない。すなわち、この公園施設はさまざまな階層の住民の多様な用途、特に野外で行われる多種多様な保養、気晴らしと娯楽、余暇を利用した身体活動に対応している必要がある。そのためにこの公園は、従来の緑地の概念には含まれていなかった様々な空間や施設を包摂する。例をあげれば、子供の遊び場、砂場、スポーツ施設、水遊び用の浅いプール、水浴場 (冬にはスケート場に使うこともできる)、日光浴・空気浴場、立ち入り自由な広い芝

生面と水辺、水飲み場、十分な数のベンチ、野外読書室、野外劇場、博物館、音楽堂、舞踏広場、珍しいものとしてはミルク配給所。要するに、余暇利用とリクレーションに役立つものがここにはなんでもそろっているのである。伝統的な公園と同じく、花壇が設けられないわけではないが、統一的な美観を作り上げるためにデザインされているのではない。そこには様々な種類の花や植物が植えられ、住居に庭を持たない人々にとって、花や緑に親しむための身近な代替物となることのほうが重視される。公園設計の主眼は、美的な見地より、一連の多様な施設をどう結び合わせ、どう利用を促すかに置かれるのである。また、住民の気軽な利用を見越して、公園緑地は居住地となるべく近いところ、できれば利用者が「歩いて行ける」距離に設けられることが求められた。

2番目の特色は、公園自体が十分な広さを備え、かつその面積のできる限り多くの部分が訪問者たちによって使われることが想定されていることである。王室の狩猟用地をそのまま公園にしたティアガルテンは、従来型の緑地の中では別格に広大な210ヘクタールの敷地面を擁するが、その内部には遊歩以外に利用できる平面は多くは存在しなかった。たとえ広場があっても、立ち入ることができないのが通例だった。ところが、フォルクスパルクでは立ち入り可能な広場が前提され、むしろそれを中心に周縁の樹林や施設が配置される。たとえば、1907年にベルリン最初のフォルクスパルクとして設営されたシラーパークで最初に目を引くのは、「市民広場」と「学童広場」と銘打った二つの平面である。それぞれが6ヘクタールと3.5ヘクタールの広場は全面が芝生で覆われ、周囲のどこからでも立ち入ることができる。

、名称だけでは判断できない。ドイツ各地には同時期に敷設された同タイプの公園で Bürgerpark (市民公園)、Stadtpark (市立公園) と呼ばれるものもあるし、現在は旧来のフォルクスガルテン型として生まれた公園に Volkspark の名を冠している例 (フリードリヒスハイネとフンボルトハイネ) もある。Volkspark を「民衆公園」「国民公園」「市民公園」と訳す例もあるが、ここではフォルクスガルテンとの混同を避けるために原語をカタカナで表記した。

10) Inge Maas : Vom Volksgarten zum Volkspark. Aus der Geschichte des demokratischen Stadtgrüns. In : hrsg. von Michael Andritzky/ Klaus Spitzer : Grün in der Stadt. Rowohlt, Reinbek bei Hamburg 1981, S.18-39, S.28

11) Ludwig Lesser : Volkspark heute und morgen. 1928, このパンフレットの著作は、実際には1910年代に行われた講演をもとにして、第一次大戦をはさんでフォルクスパルクが本格的に着手される1927年に出された。パンフレットの末尾には「ドイツ民衆の肉体的、道徳的ならびに精神的健康に捧げる」と書かれている。

フォルクスパルクの登場によって、その用途や使用方法が大きく変わったものの筆頭が芝生の用途である。芝生は従来の風景式庭園やフランス式整形庭園にもふんだんに使われていたが、樹林と樹林の空隙を埋め、幾何学的な装飾花壇を緑の絨毯のように縁取る芝生は、眺望や美観を増すために敷かれるもので、ほとんどの場合立ち入りが禁止され、見張り番が常駐することもあった。それがフォルクスパルクにおいては、芝生の平面には仕切りや垣根が設けられず、自由に立ち入り、横切り、そこで様々な活動を行うことができる空間になる。休息用芝生 (Ruhewiese)、横臥芝生 (Liegewiese)、遊戯用芝生 (Spielwiese)、体操用芝生 (Gymnastikwiese)、祝祭芝生 (Festwiese) など、広範な用途に供される立ち入り可能な芝生地はフォルクスパルクの必須要件として、どの公園にも設けられるようになる<sup>12)</sup>。そのためにトレプトワー・パルクなど、従来の公園のなかには、一部の芝生地への立ち入りやそこでの遊戯を容認するものもあらわれた。

もう一つの特徴は子供たちによる利用のための配慮が最大限になされていることである。そもそも、子供の健康の問題は都市問題の中でも最も緊急に解決を迫られていたものだった。狭小で劣悪な居住環境にも、周囲の街路にも子供のための遊び場の余地はなく、土に触れることはおろか、朝日を見たこともない子供たちもいた。特に憂慮されたのは、日光や外気に恵まれない市街地のただ中で生まれ育った貧困層の子供たちの栄養不足と運動不足による発育の遅れと罹病、さらに風紀や性の乱れの問題だった。子供の発育や教育にとっての身体活動の有効性と必要性が認識されたのは19世紀の後半以降であるが、公的な敷地にそのための場所や施設が設けられることはなかった。ドイツ帝国の成立 (1871年) によって、次代の

国民をどう育て、彼らの身体をどう作るかが改めて緊急性を帯び、国民的な議論に上り始めていたにもかかわらず、学校教育の中で子供の遊戯や体育の意義が認められるのは、ようやく1900年になってからである<sup>13)</sup>。

新しいタイプの公園においては、子供たちはもはや大人に付き従う「小さな臣民」ではなく、まさに主役である。そこでは子供のための遊び場に中心的な役割があてがわれ、個人もしくは集団で行うあらゆる種類の遊びが想定されている。砂遊び、ボール遊び、縄跳び、綱引き、ブランコ、かけっこ、シーソー、はしご登り、ジャングルジム、馬跳び、水浴、水遊び、ボート漕ぎ、冬季のスケート、そり遊び、などなど。フォルクスパルクにおいてそれぞれの遊び場は十分な間隔を置いて配置され、どれだけ子供たちが押し寄せても不足のない広さをそなえている。遊びだけではなく、子供たちの身体の露出について寛容なものも大きな特色である。子供たちが窮屈な晴れ着を脱ぎ捨てて公園の広場で外光と空気に肌をさらし、時には真裸で水遊びや砂遊びに興ずる姿は、19世紀的な子供観からすればまったく新しいものだった。公園は、主役となった民衆が子供たちを前面に押し出し、彼らの価値観と身体文化を華々しく告知し、表出する舞台となるのである。

フォルクスパルク設置を求める動きは20世紀初頭から高まるが、この時期にベルリンで実際に設営された公園は前述のシラーパルクだけである。他の多くの同タイプの公園は第一次大戦後、主に1920年代のワイマール共和国の時代に着工された (最終ページの表を参照)。フォルクスパルク型の公園の数は1918年以降、急速な伸びを示し、「緑地熱」というべき活況を呈す<sup>14)</sup>。王制が廃され、共和制が導入されたこの時期は、新たな主役である「民衆」の意思として公園を開設す

12) 当時で最大の広さを持った芝生面は、ハンブルクの市立公園 *Hamburger Stadtpark* の12 haに及ぶものである。ちなみに、同じく芝生を指すにしても、*Rasen* は美観を重視した造園用語であるのに対し、*Wiese* は実用的であるとともに、牧草地など牧歌的な田園風景を連想させる言葉である。

13) Inge Maas: a.a.O., S.29-31 特定のスポーツに特化されない遊戯 (Spiel) の機会を子供に与え、そのための場所を確保しようという考え (Spielplatz 運動) は19世紀半ばから世紀転換期にかけて、英国や米国のプレイグラウンド運動の影響も受けてドイツでも高まっていた。ヘネボー上掲論文 36 ページ

14) Inge Maass: Volkspark. In: hrsg. von Lucius Burckhardt: *Der Werkbund in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Form ohne Ornament.* Deutsche Verlags-Anstalt 1978, S.57-65, S.58 f.

るのにむしろ好都合だった。同じ理由から用地の取得も比較的容易で、ベルリンの大規模な公園はその多くが、不要になった兵舎や射撃場、練兵所など、もとは軍用地だった敷地を利用して設けられた。まさに「民主主義的」な解放の気運が公園ブームを支えていたのである。大規模な土木工事である公園の設営にあたって、帰還兵を含む大量の失業者が活用されたのも、この事業の「民衆性」と「公益性」を物語るものであろう。政権を握る SPD（社会民主党）にとって公園の設置は、万人受けし、しかも即座に効果を上げられる公共事業だったとするインゲ・マースの説がある<sup>15)</sup>。彼女によれば、それは当時の SPD が革命的群衆の暴発的行動を防ぎ、階級闘争に替わって、生活改善や保健福祉的な活動を通じて国民的融和を民衆に訴えかける手段だった。公園敷設は都市大衆を公的な権力のくびきから解放するとともに、身近な生活条件の改善を通じて彼らの融和と統制をはかるという意味も持っていたのである。実際に、SPD の勢力が強いベルリン、ハンブルク、フランクフルト（マイン）では、大規模公園と大規模集合住宅（ジードルンク）の設営計画がこの時期に同時進行で次々に手掛けられた。

#### IV 緑地帯構想に向けて

ベルリンではワイマール共和国の期間に 10 年近くのフォルクスパルクが設置される。この間、ベルリンは市域を 14 倍近くに拡大し、人口もほぼ倍の 380 万人になるために単純な比較はできないが、第一次大戦前に比べて格段に多くの公園緑

地が住民に提供されたことになる。特に、レーベルゲ、ユングフェルンハイデ、ヴァールハイデなど、100 ヘクタールを超える巨大な公園緑地が次々に誕生し、フォルクスパルク開設の動きはレッサーが言う「運動」というべきものにまで高まる。ただし、数や面積はさておき、フォルクスパルクのさらに重要な意義は、それが都市計画における「緑地」の意味を大幅に拡張したことにあると思われる。そもそもフォルクスパルクは「すべての余暇活動に対応」<sup>16)</sup> していて、十分な広さを持つことことが必要<sup>16)</sup> だけで、形状やデザインに格別の条件があるわけではない。それは保健や衛生、休養に役立つものならなんでも取り入れ、公園内の敷地や施設を包摂するだけでなく、公園外の既存の小公園、遊び場、スポーツ施設、プロムナード（並木道）、広場、墓地、分区園、都市外郭の森林、原野、農地、湖水や川の水面、といったスペースとも緩やかに接続している。そこから、「河畔であれ緑地であれ、どんな種類のものもフォルクスパルクに値する」<sup>17)</sup>、という考えも生まれる。たとえば、自給自足的な食糧生産に使われる分区園（個人使用の貸農園・クラインガルテン）も、「使用価値」という意味では立派な緑地であろう。実際、レーベルクやユングフェルンハイデの公園敷地には、何年にもわたって継続使用できるクラインガルテンの集合地が計画時から併設されていた。だれもが通り抜けられ、だれもが利用でき、万人の休養や健康増進に資する緑地——それが都市における新たな緑地の概念だった<sup>18)</sup>。

- 
- 15) Inge Maas : Vom Volksgarten zum Volkspark, S.33-34 ; フォルクスパルク運動のイデオロギー的な側面については次を参照。Stefanie Hennecke : Der Volkspark für die Gesundheit von Geist und Körper. Das ideologische Spannungsfeld einer bürgerlichen Reformbewegung zwischen Emanzipation und Disziplinierung der „Volksmassen“. in : Stefan Schweizer (Hrsg.) : Garten und Parks als Lebens- und Erlebnisraum : Sozialgeschichtliche Aspekte der Gartenkunst in früher Neuzeit und Moderne. 2008, S.151-164.
- 16) Der Artikel „Volkspark“ im „Illustrierten Gartenbau-Lexikon“. Zweiter Band, Berlin : Verlagsbuchhandlung Paul Parey, 1927, S.666. レッサーも「緑地 (das Grün)」という言葉を広範囲に使って、公園外の芝生の広場、花壇、野外スポーツ施設、水辺や水面、クラインガルテン、並木道などもそれに含まれる、としている。
- 17) Fritz Encke ; Volkspark. in : Gartenkunst, Jg.13-9 (1911) フリッツ・エンケは大都会における「社会的な緑」の普及に努め、主にケルンで市域を様々な緑地で取り囲む環状緑地の設計に関わった。
- 18) 日本語の「緑地」がドイツ語の Grünfläche の訳語であることはすでに冒頭で触れたが、この概念が日本の造園学や都市計画学に積極的に取り入れられた時期は 1925 年から 1930 年前後であり、ちょうどドイツでフォルクスパルクが盛んに築造されるとともに、それをどう都市計画の中に取り込むかが熱心に議論されていた時期にあたる。

このような拡張された緑地概念を都市計画の中で積極的に活用したのが先に名を挙げた建築家・都市計画家のマルティン・ヴァグナーである。1915年の論文でヴァグナーが「衛生緑地」に、心身の健康を増進する機能があるとしていることはすでに述べた。彼はそこで、大都市住民にとっての緑地の意義は存在価値より利用価値にあるとし、その存在と広さについては衛生的価値が前提とされなければならないとする。また、緑地は単なる「空き地」ではなく、用途に応じて遊び場、スポーツ場、フォルクスパルク施設、都市林、クラインガルテンまたは家庭園に造成する必要がある、なおかつ住宅地の近く、それも利用者が徒歩で20分以内に行ける距離に設置しなければならない。ヴァグナーはさらに、各住民層の多様な利用に応えるために、住民1人当たりの緑地の最小必要量を算定し、平均値として児童の遊び場2.4 m<sup>2</sup>、スポーツ場1.6 m<sup>2</sup>、プロムナード0.5 m<sup>2</sup>、公園2 m<sup>2</sup>、都市林13 m<sup>2</sup>の合計19.5 m<sup>2</sup>を充当しなければならない、としている<sup>19)</sup>。ここでは緑地が、公園や広場といった名目的な存在価値からではなく、その利用目的と利用価値によって測られる、人間生活に不可欠な基本要素としてとらえられていることが重要である。それは単に開かれた空地 (open space) であるばかりでなく、自由な (frei) 利用を促す「自由空地 (Freifläche)」であるべきなのである。しかもこの空地は単体の緑地ではなく、公園をはじめとする大小の緑地が結び合って一つの系統を形作る緑の集合体、すなわち緑地帯を成す必要がある。

都市を取り巻く緑地帯の構想はヴァグナー以前にもあった。19世紀の後半に、アーデルハイト・ドナ・ポニンスキー伯爵夫人がアルミニウスという筆名で、都市貧困層を住宅難と生活苦から救済するために提唱した、都市郊外に緑地帯で結ばれた居住区を設置する案は、その後のドイツ各地の緑地帯構想に大きな影響を与えたものとされる<sup>20)</sup>。海外からの影響としては、アメリカの造

園・景観設計家フレデリック・ロー・オルムステッド<sup>21)</sup>によって考案された、緑地同士をパークウェイという呼ばれる並木道によってつなぎ、都市を緑地帯で環状に取りまくパークシステム (公園系統) がある。このシステムは、19世紀終わりにから20世紀の初めにかけてボストン、ミネアポリス、カンザス・シティなど、アメリカの各都市で実際に導入され、ドイツでも注目された。また、イギリスのエベネザー・ハワードが出した田園都市 (Gardencity) 構想でも、田園と都市を有機的に接合する緑地帯が重要な役割を帯びていた。ヴァグナー自身が、フォルクスパルクを唱導するレッサー、ハリー・マースらと共に、ドイツにおける田園都市の実現に中心的な役割を果たしたドイツ工作同盟 (Deutscher Werkbund) のヘルマン・ムテジウスのもとで建築家としてのキャリアを始めた。同じく、のちにヴァグナーと共にブリッツの公営集合住宅地 (ジードルンク) を立案・施工するブルーノ・タウトとレーベレヒト・ミッゲも工作同盟のメンバーである。また、ドイツ各地でフォルクスパルクを設計する造園家の多くも、ドイツ工作同盟のメンバーだった。

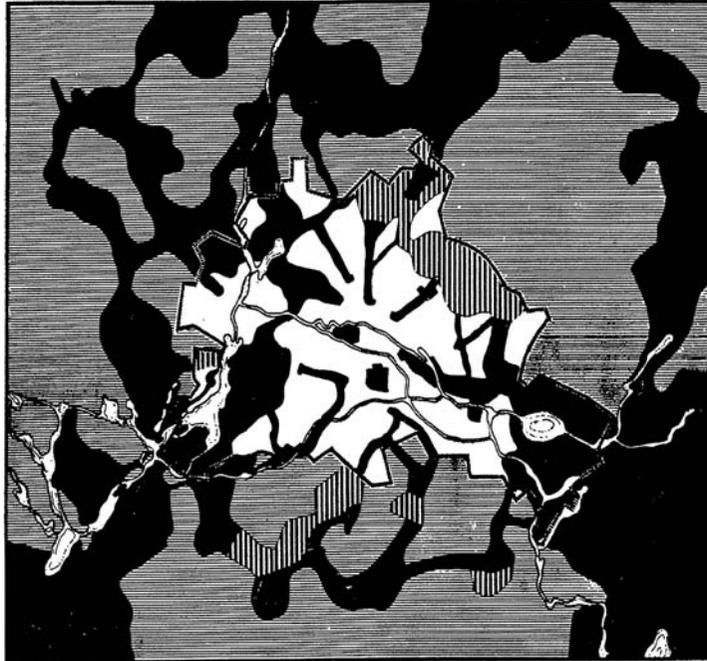
先行するこれらの構想を視野に入れながら、ヴァグナーは緑地帯のアイデアを、1920年に市域が14倍、人口360万人に拡大した大ベルリン全体の総合的な土地利用計画の中に取り入れる。第一次大戦後、DEWOG、GEHAGなどの公益住宅供給公社で都市計画と住宅建設行政に集中的に取り組んだ彼は、1926年から33年までベルリンの住宅・建設行政の最高責任者にあたる都市計画局建築参事官の地位に就いた。その間にヴァグナーとヴァルター・ケッペンによって提出された「ベルリンとその周縁地域の空地計画」の図面には、周辺の森林や農用地も含めた大規模な緑地でベルリンを取り囲み、さらに市街地内の公園や広場、クラインガルテン施設、運動場、墓地などを連結させて街区に緑地を楔のように嵌入させ、都市の内部にまで緑地を行き渡らせる計画が示されている

19) Wagner, a.a.O. S.3, S.21-22, 一人当たりの緑地の必要量については S.92 およびヘネボー上掲論文 48-51 ページ

20) Gräfin Adelheid Dohna-Poninski (Arminius) : Die Großstädte in ihrer Wohnungsnot und die Grundlagen einer durchgreifenden Abhilfe. Leipzig. 1874 また、ヘネボー上掲論文 26 ページ

21) Frederick Law Olmsted (1822-1903)

FREIFLÄCHENSHEMA STADTGEMEINDE BERLIN u. UMGEBEND. ZONE



■ 一般緑地    ▨ 区域外農地  
 ▩ 灌漑畑    - - - - - ベルリン行政区域界

る。緑地は人口密度と用途によって配置されており、その面積はヴァグナーによる住民一人当たりの緑地必要量の計算に基づくものであった<sup>22)</sup>。

この計画は実現には至らなかったものの、ベルリンにおいて可能とされた緑地帯計画の極点にあたるものといえよう。ヴァグナーがタウトや造園家のミッケと協働してベルリンで手がけた、ブリッツ (1926-27年)、ライニッケンドルフ (1929-30年)、ジューメンスシュタット (1930-31年) など一連の大規模な集合住宅団地 (ジードルンク) の建設は、この計画を引き継いで都市住民の生活環境の間近に「利用しうる」緑を配置するという田園都市的な構想を部分的に実現したもの

だった。これらの事業に取り組んでいる最中に、ヴァグナーは1933年、ヒトラー政権の成立に伴って辞職を余儀なくされ、その二年後にはユダヤ人であったため市民権を剥奪されて亡命する。

おわりに

現在のベルリンには全市域 89,129 ヘクタールの中に 11,622 ヘクタールの公共緑地がある。これは水面、森林、農地を含まない面積で、それらを含めると広義の「緑地」の面積は、37,818 ヘクタールで、これは市域の総面積の 42.4 パーセントを占める<sup>23)</sup>。試みに、先にあげたヴァグナーによる緑地の住民一人当たりの必要量の算定基準を

22) Walter Koeppen und Martin Wagner : Freiflächenschema Stadtgemeinde Berlin und umgebender Zone. in : Die Freiflächen der Stadtgemeinde Berlin. Denkschrift II des Amtes für Stadtplanung Berlin (1929) (「ベルリン市のオープンスペースに関する覚書」) 図版はヘネボー「ベルリン公園の100年史」53ページ掲載のものを使った。

23) 数字はベルリン市庁の Senatsverwaltung für Umwelt, Verkehr und Klimaschutz Berlin, Referat Freiraumplanung und Stadtgrün のホームページ (Stand : 31. 12. 2016) による。

[http://www.berlin.de/senuvk/umwelt/stadtgruen/gruenanlagen/de/daten\\_fakten/index.shtml](http://www.berlin.de/senuvk/umwelt/stadtgruen/gruenanlagen/de/daten_fakten/index.shtml) このホームページには、ベルリン市内 12 区に所在する 50 余りの主な公園緑地のデータがまとめられている。最終ページに掲げた表はこれをもとにしたものである。

適用すれば、現在の人口 350 万人に対し、公共緑地は一人当たり 33.2 m<sup>2</sup>、広義の緑地は 108.5 m<sup>2</sup>で、きわめて潤沢である（ただしこれはヴァグナー提唱するように用途を分けて出された数字ではない）。緑地を維持することに対するこの都市の住民や行政の根強い志向には驚きを禁じえない。しかもベルリンは、過去 70 年の間に、戦時体制下の軍事目的の首都改造、爆撃による跡をとどめぬほどの瓦礫化（公園の中にも防空壕が設置された）、戦後復興のための大工事、さらに 40 年にわたる東西ベルリンの分断を経ている。戦前の公園敷地はその間に荒廃し、一時は食糧自給のための畑地や瓦礫置場に変じた。にもかかわらずそのほとんどが、今は緑地としての機能を取り戻している。そればかりか、公園を含めた緑地の面積は戦前よりむしろ増加し、今も増え続けている。

もちろん緑地を維持しようとする志向は、戦前の都市緑化構想をそのまま引き継ぐものではない。都市緑化の動機づけは各々の時代の必要に応じて変化してきた。たとえば、第二次世界大戦後、瓦礫の山からベルリンを復興するに際して、不要な瓦礫を積み上げた小山や、建築用の砂利を採取した跡に植樹・植栽を行って一帯を緑地化することはこの時期の典型的な公共事業で、そのために大量の失業者が投入された。また、1960 年代から深刻化した世界的な環境汚染や環境破壊に

対処するために、1970 年代以降は緑地が都市環境にもたらすポジティブな効果に注目が集まるようになり、住民運動が緑地の保存と拡大に積極的に取り組んだ成果も大きい。さらに脱工業化社会においては、緑地は生活環境の良好性や「心地よさ」といった、生活の質（Quality of Life）を保証し、とりわけ都市環境においては生活環境に正の価値をもたらすファクターとして重視され、現在に至るのである。

こうした変遷の過程でも、緑地を都市環境に不可欠でかつ「有用な」基本要素ととらえる考え方はベルリンにおいて基本的に一貫性を持っている、と見るのが本論の立場である。もちろん緑地は樹木や植生の成長や変化にともなってその相貌を変えるものである。用途の変化にともなって、当初のデザインの原型をとどめないものもある。しかし変化しながらもベルリンの公園緑地はそのたびに新たな意味を帯びて「発見」され、荒廃している場合には修復され、緑をとり戻してきた。実用的な緑地観は 19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、装飾的な緑地観から身を離して醸成され、第一次大戦をはさんでワイマール期に各地に設営されたフォルクスパルクにおいて緑地を実際に「使用」することで、都市住民にとっての具体的な経験として定着されたといえよう。

表 ベルリンに現在ある Volksgarten 型と Volkspark 型の公園緑地

種別	名称	面積 単位：ヘクタール	着工年、完成年	設計者	所在地（現在の区名）
Volksgarten	Großer Tiergarten	210 ha	1833-36	Peter Joseph Lenné, Gustav Meyer	Mitte
Volksgarten	Glienicker Park	90,1 ha	1816,1824,	Peter Joseph Lenné	Steglitz-Zehlendorf
Volksgarten	Volkspark Friedrichshain	49 ha	1840-48,1874,	Gustav Meyer	Friedrichshain- Kreuzberg
Volksgarten	Volkspark Humboldthain	29 ha	1869-1876	Gustav Meyer	Mitte
Volksgarten	Treptower Park	88,2 ha	1876-1888	Gustav Meyer, Hermann Mächtig	Treptow-Köpenick
Volksgarten	Viktoriapark	12,8 ha	1888-94,	Hermann Mächtig,	Friedrichshain- Kreuzberg
Volkspark	Schillerpark	29,4 ha	1909-13	Friedrich Bauer	Mitte
Volkspark	Lietzenseepark	10,1 ha	1912-14,1919-20	Erwin Barth	Charlottenburg- Wilmerdorf
Volkspark	Volkspark Jungfernheide	146 ha	1920-1927	Erwin Barth	Charlottenburg- Wilmerdorf
Volkspark	Stadtpark Steglitz	17 ha	1906-14,1929,	Fritz Zahn, Rudolf Korte	Steglitz-Zehlendorf
Volkspark	Volkspark Rehberge	78 ha/115 ha	1926-1929	Erwin Barth	Friedrichshain- Kreuzberg
Volkspark	Volkspark Hasenheide	47 ha	1936-39	Joseph Pertl	Neukölln
Volkspark	Volkspark Wilmerdorf	18 ha	1912,1930-33	Richard Thieme, Wilhelm Riemann, Eberhard Fink	Charlottenburg- Wilmerdorf
Volkspark	Volkspark Wuhlheide	79 ha/196 ha	1919-32,	Ernst Harrich	Treptow-Köpenick

\*面積は設置時のものではなく、現況である。また、Rehberge と Wuhlheide については隣接した公園の面積との合計を併記する。  
\*注 23 で示したとおりベルリン市庁の環境、交通、大気汚染防止局の「緑地及び空地専門部局」の公表した 2016 年末の資料をもとに作成した。